

医学部図書館が騒々しいのは

医学部5回生 中 坊 周一郎

昨今は医学界も改革の時代ということなのだろうか、これから医師になる私たちの人生に大きく関わってくる変革の波が押し寄せてきた。「研修医の必須化」である。実は今までは研修医というのは法的に定められた身分ではなく、個々の病院が自発的に、あるいは必要に応じて新卒の医師を研修医として職業訓練していたのだが、今回の改革で必須化されることになり、全ての医師は医師国家試験合格後、定められた2年間の研修ローテーションをまわらなければならないようになったのだ。その2年の間、我々は数ヶ月刻みで各科に「体験入学」することとなる。まあ単純に考えて、半人前として気楽に過ごせる時間が2年長くなって、しかも研修医の2年間も国家に保証された一定量の給料までいただける、ということで我々学生としては願ったりかなったりの新制度でもある。

ところが、この制度の導入は、そういいことばかりでもない。今までは卒後は京大病院やその関連病院を中心としてほぼ希望どおりの病院に入ることが出来たが、これからは病院ごとに試験による選抜があるというのである。しかもその採用試験はおしなべて卒業前の7・8月頃に行なわれるというのだ。いままでは我々学生は卒業後の3月に行なわれる医師国家試験に合格することだけを考え、「その後はその後」というようなのんびりした勉強の仕方をしていたし、京都大学のカリキュラムもそのように組まれている。しかし、それではとうてい間に合わない事態になったのである。それどころか、この採用試験は相手より1点でも2点でも上をとらなくてはならない仁義無き相対評価型の試験だ。一定点取れば合格、という絶対評価型の医師国家試験とはわけが違う。そんな試験で、我々より半年も早くカリキュラムを完了しその

分だけ勉強のすすんでいる他大学の学生と戦わなくてはならないのである。そういうことを今年の4月になってはじめて知らされ、「さあ大変、急いで勉強を進めなければ！」というわけで、5・6回生が勉強すべく図書館に殺到した。

図書館で勉強、というと孤独にコツコツ自習するイメージがあると思うが、医学生は単に自習するだけではなく「勉強会」というものを何人かで開いて勉強する風習がある。知識の偏りを無くすることが医師国家試験合格に必要なからだそう。そんなニーズにあわせて医学部図書館には「グループ学習室」というものがあり、特に最近はいつも誰かがそこで勉強会を開いている。しかしこのグループ学習室、防音対策が全くなされておらず、中で談論風発する学生の声が本来静謐であるべき図書館に騒音として飛び散ることになってしまっている。

これでは一般の利用者はたまったものではないだろう。私などは騒音を発する方にまわることもあるので、普通に図書館で自習していて気分を害することは無いが、調べものをしに来た方など非常に迷惑に思われるのではないだろうか。

図書館の方々が色々なニーズに柔軟に対応してくださっているのを見るにつけても、いずれはこれも解消されると思うが、何しろ設備面の問題なのですぐにはどうしようもない。さりとて我々学生にしても、声をひそめてやるのでは勉強会をする意味が無いのである。

図々しくはあるが、一般の利用者の方々におかれては「学生たちの慌てておることよ」と一笑に付しつつ大目に見ていただけないだろうか。不意打ちを食らってあせっている学生からのお願いである。

(なかぼう しゅういちろう)